

美唄歯科医師会の沿革

美唄歯会の夜明け

空知支部会沼貝分会時代

空知支部会美唄方面会時代

美唄歯科医師会50年沿革史

思い出の写真から

美唄歯科医師会五十年の歩み

美唄歯会の夜明け

大正 7 年 高橋常保先生 美唄にて開業さる

明治23年 空知郡沼貝村設置さる。人口1,087人。

明治39年 5 月 歯科医師法制定

歯科医師法制定により歯科医師になるには「一定の資格を具備し内務大臣の免許を受くることを要する」ことが必要となる。

それまでは明治23年に定められた「入歯抜口中療治、設置営業取締規則」による登録鑑札での治療で、投薬などは認められていなかった。

大正 3 年 美唄軽便鉄道開通。沼貝駅と我路駅開業。

大正 4 年 三菱美唄鉱開山（飯田炭鉱を買収）

大正 5 年 沼貝村人口20,700人

三菱美唄鉱業所本院開設

大正 7 年 沼貝町人口26,000人余

北海道の歯科医業のはじまりは、明治 9 年、大月亀太郎氏の函館での開業にはじまる。歯科医籍所有者としては、高木五三郎氏が同じく函館で開業したのが明治23年である。明治41年に会員12名をもって北海道歯科医師会が設立しているが、任意の設立であり、大正15年にはじめて法令による北海道歯科医師会の設立となる。（会員数274名）

これに先立つこと 8 年前、大正 7 年に高橋常保先生が美唄での開業第一号である。大正 7 年という年は函館、札幌、小樽、旭川、室蘭等、各都市の歯科医師会の創立した年にあたる。

全道的に歯科医師制度のいまだ整わないなか、香具師等に依存した歯痛医療から脱皮した第一歩といえる。ただ大正 6 年頃、夕張の梶徳太郎先生が歌志内開業の折、美唄に分院を設置し、留萌の名誉市民伊佐津氏が勤務されたという記述が高橋常保先生の記述にある。（2 頁参照）

当時の状況は、前美歯会会長、現顧問雨田 実先生が、道歯会通信の会員のひろば欄に、詳細に書かれているので、少しく引用する。

私の記憶にあやまりがなければ、大正7年に高橋常保先生が、この地に居を定め、美唄における第一号の歯科医院を開業されたのが、美唄歯界の嚆矢である。高橋先生がどういう理由で美唄を選ばれたか、定かでないが、それ迄の美唄では歯痛に関しては売薬に頼るか、香具師（ヤシ）、的屋（テキヤ）のたぐいの長井兵助の流れをくむ居合抜きとか、松井源水の流れをくむ独楽廻しなどの人達が、大道芸等で人を集め、歯痛の薬や歯みがき粉を売るというたぐいの人達に頼っていたという程度が大部分であったというような所に、札幌で修業して東京で資格を取得した、貴公子そのものの高橋先生の医院が門前市をなしたであろうことは想像するに難くない。

高橋先生は札幌の林清太郎先生門下の優等生と聞いている。林先生は幼少のころから札幌での歯科開業第1号の、小堀乾三郎先生に師事し、後に、高山歯科学院（現東歯大）において、小幡英之助先生に学んだという。小幡英之助先生は本邦歯科医籍第1号の大先輩で、我が国歯科界に功績が多く、本道歯科界にもその流れをくむものが多く大いなる影響を与えたという。

小幡先生門下の小堀乾三郎先生に師事しさらに小幡先生に学んだ林清太郎先生の門を明治40年、高橋先生がたたいたことが、先生が歯科に第一歩を印した年といえる。以来5年間、夜を日についでがんばり抜き、明治45年、東京歯科医学校に学び、大正3年、歯科開業試験に合格後、札幌にもどり、林清太郎先生の医院でお礼奉公を数年間された後、大正7年美唄において、歯科医院を開業された。

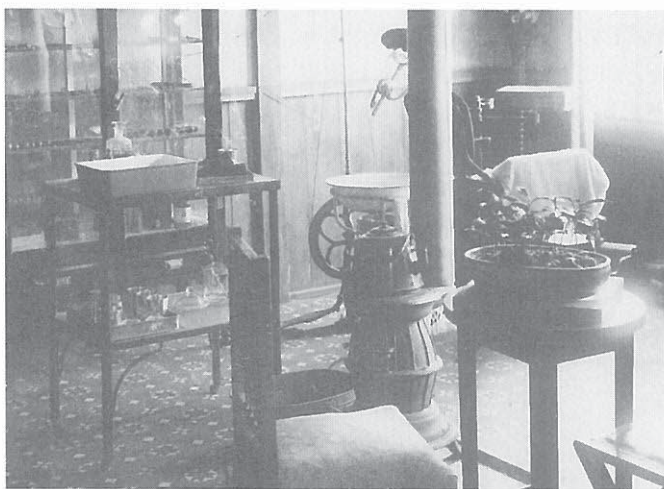
美唄市百年史によると、大正5年10月10日三菱美唄炭鉱所病院開設の次の行に、沼貝村で初めて高橋歯科医院（高橋常保院長）開設と記されている。その年の沼貝村の戸数3千2百、人口2万7百と記されている。美唄市政30年の歩みには当市における歯科の嚆矢は高橋常保氏が大正8年、現在でいえば西1条通りと空知神社参道の交わる南に医院を開設したのが始めとある。現在は、すっかり数の少なくなった明治生まれの古老にたずねると、確か隣家は櫛田鉄工所であり昭和11年函館本線ガード下の銀河の南に移転されるまで開業されていたとのことで、そのため翌年5月1日の大火の難をまぬがれたとは、まことに運の良い話である。北海道歯科史料ノート道人名辞書によると、大正7年医院開設とあるが、前年夕張市街地に遊び視察するところありとあるので、ご長男の常美先生に問い合わせたところ、確かに夕張市街地で開業されていたのは確かで、その折に先生の姉上が誕生されているという。その姉上が先日ご不幸になった、岩見沢歯会会員の宮地信司先生の奥様になられたお方と思われる。高橋先生はその頃、夕張が後年あのように大きくなると予想できなかったようであつたらしく、交通の便と将来の発展ではむしろ室蘭を望んでいたそうである。またニシン景気の積丹の岩内（奥様の出身地）も視野にあったそうである。それがどうして美唄となるか、歌志内開業の友人が美唄に何年か出張診療をされていて、その折の収支記帳簿を見せてもらったうえ、医院住居などの世話までしてくれたので心が動いたとのことである。室蘭の友人からは、そこまで具体的な話はなかったようであつたとお聞きする。林清太郎先生門下の優等生として、いずれ札幌という夢は当然あったのでは（美唄なら交通の便の点だけでも、他の3地区より勝れている）と思われる。後日常保先生談によると、歌志内の友人の美唄出張診療収支簿は農閑期の歯科医院の最盛期の数ヵ月間のものであったようで、正に千慮の一失であつたとのことで、それ故か開業されながら嘱託医として三菱美唄炭鉱病院の歯科に通勤され、夜間開業が主であつたそうであるが保険外診療が主力であり、ゴールドが主であつた古き良き時代であつたことに変わりはなく、現在とは大変なちがいはあると思われる。

明治40年頃より大正12～3年頃までの漸く、正式医籍所有者としての歯科医が活動しはじめた頃の歯科医療の状況は雨田先生が道歯会通信に「明治は遠くなりけり」として記されている。その当時の診療の様子が、上手に描かれているので引用すると、

明治40年頃札幌には、横山先生、林先生、大月先生の診療所があった。その頃診療室には小幡式木製の治療台と足踏式エンジンがあり、治療台には鏡のついたケビントや簡易唾壺が取り付けられてあり、スピットンは溜まったら留め金を脱して下水に捨て、また取り付けの仕掛けになっていて、それは和服姿の白衣を着た書生の仕事であった。

書生は2、3人はいたとのことである。お洒落な先生は和服姿に行燈袴を着用していた。患者さんも皆和服、高級な患者さんは人力車で通ったとのことであり、2%のボール水の含嗽薬がよく用いられ繻帯は三角巾が用いられたそうである。

使用される材料や器具は全部舶来で、セメント、アマルガム、ガッタパーチャの末に至るまで舶来品であり、バーもクレンザーいうに及ばず、和製のものは、安義歯の陶歯位で、すべて舶来万能であったという。エンジンの動力は助手の足でこれは舶来ではない。金箔充填などの場合は少なくとも1時間はかかり、助手の足は棒になったという。勿論ラバーダムを掛け唾液は時々スポイトで吸水したそうである。



金箔はアルコールランプに乗せた焼還皿で焼還して窩洞に運び先生の充填器を助手が木槌で打って積み重ね充填するので、小さな窩洞でも大抵1時間はかかったという。隣接面窩洞などは2、3日前から歯間にゴムを挟んで上げ充填時には固い木を歯頸部に挟んで充填を行う。木槌は充填器の長軸に対して真直に打たねばならず、先生の腕の動きを注視しなければならないので少しも気が抜けなかったとのことである。

治療室がその有り様であるから、技工室も大変であったという。冠はすべて縫冠、義歯はゴム床で、フラスコは現在と余り変わらないが、床の部分、前歯部から小臼歯部迄唇頬部歯齦側は歯齦色ゴムを、他の大部分は棒色のゴムを使い、ゴムを包んでいた布を上下カンの間に挟み湯に浸してプレスに掛け過不足を見てボルトを締めてこれを蒸和罐に入れて蒸和する。厚い銅で出来たフラスコ2個位入る高さのものと、これに冠せる鋳鉄製のメートルの付いた蓋をし、手元に手で持てるように把手のついた厚い締め棒で充分締めてから

加熱し320度で約1時間続けるが、それ以上に温度が上昇しないよう調節に気を配らなければならない。ウっかり調節を忘れて温度が更に上昇すると、蒸和罐の安全弁が破裂し、ヒドイ破裂音と共にメートル付きの蓋が天井を突抜け、屋根の上にまで飛ばすこともあるというから張りつめた1時間ではある。

技工は主として夜業が多かったそうであるという。縫製冠、ブリッジ、インレイなど全部がゴールドであったという。先生はご機嫌で鼻歌交じりでロー着をし、圧迫鑄造をやり、メロットをつぎ込む。今から考えると夢のような夜業が夜半ともなると流しの夜タカそばなど振る舞った。これがまたどんなに助手達の楽しみであったか、夜業も苦にならなかったそうである。

因みにその頃の治療代は1歯20銭、2歯は計30銭、充填料金、セメント80銭、アマルガム1円20銭、金箔充填5円以上、綿花の代わりに吉野紙が使われたとのことである。明治の技工室で忘れ得ない物が1つあるそうである。口力吹送器である。ニッケルメッキをした細長い金属管の口に当たる部分はラッパ状でこれを右手に持ちアルコールランプの焰を縫製冠でもブリッジでも鑲着でもインレー溶融でも口力吹送器で金ローを溶かし、左手のピンセットで基体を動かしてロー着をし、またはピンセットを圧迫蓋と持ち替えてインレーを完了させたそうである。技工室の主要材料は金であり、ルツボで溶融した金塊を金敷に乗せ、金槌で延展するのであり、5匁つまり18.75gの金塊を1cm5mm幅で伸ばすのは中々根気の要る仕事であったという。因にその頃ゴールドの使用量は月にもよるが、大体月に平均して100gは下らなかったとのことであり、先生がたは夜の食事など家ですることはまずなかったとのこと。500円あれば東京で1ヵ月大尽遊びが出来た頃に毎月1000円以上の収入があり、12月等は万に近い収入があったそうで、火災にあっても、五体満足なら余り苦勞もせずに医院を再興出来たとのことである。



大正13年 7 月13日 空知支部会沼貝分会開設

大正 9 年、沼貝町人口 32,321人

うち 2 万人は我路より上流に居住す

大正11年 健康保険法公布

大正13年 宝田（ホーデン）炭鉱：三井採炭開始

歯科学報社刊によれば、大正 5 年、道内歯科医師数は58名であり、札幌地区14名、小樽地区 7 名、旭川地区 8 名、函館地区 8 名、その他の地区21名とある。

大正 7 年、札幌、函館、小樽、室蘭、旭川等の各郡市区歯科医師会が相次いで創立されている。美唄歯科医師会は、いまだ存在せず、美唄地区を包含するのは、空知歯科医師会であるが、その空知歯科医師会では大正12年より漸く準備期に入り大正15年に北海道歯科医師会空知支部会を結成するに至る。

すなわち、大正12年 3 月17日に札幌ほか 8 郡歯科医師会長、林 清太郎氏が、岩見沢に陸原大輔氏を訪問。同会解散のため決算となり財政処分の結果、郡部旧会員が将来、歯科医師会を設立するために、保全使用を委託せられ、陸原大輔氏は、旧郡部会員に代わって、これを受け、保管をなせりとある。これにより空知歯科医師会は胎動する。

大正13年 7 月25日に、滝川町佐藤勘次郎氏他10名が発起人として、西川直次郎氏宅（岩見沢町）にて空知歯科医師会設立準備総会を開催した。

仮事務所は岩見沢町、陸原大輔氏方とする。大正13年11月29日、出席者16名にて、深川町以北は旭川歯科医師会に入ることが決定。

会長に佐藤勘次郎氏、副会長陸原大輔氏と決まり、高橋先生は理事をされた。この時美唄は空知支部会沼貝分会として設立される事になる。

大正末期の13年頃から開業する者が急速に増加して、「美唄町勢一斑」によれば、大正14年末美唄地区での開業状況は、5 歯科医院、6 名の歯科医師とある。

高橋歯科医院 高橋常保 札増 悟、永山歯科医院 永山喜代二、
共立歯科医院 奥村 照、桜田歯科医院 桜田巳年二、石川歯科医院 石川寅雄の諸氏である。

大正15年 8 月 北海道歯科医師会 空知支部美唄方面会創設

大正15年（昭和元年） 北海道歯科医師会設立

沼貝町が美唄町になる。

人口32,240人 歯科医師数 10名

北海道歯科医師会は大正15年8月11日をもって、中川健蔵道庁長官より認定されており、各郡市歯科医師会は支部会の位置をもって、活動をはじめた。

各郡市歯科医師会の独立は、昭和23年迄待たなければならない。

空知歯科医師会の前身である、空知支部会は6方面地区から構成されており、（滝川・砂川・深川・岩見沢・美唄・夕張）、ここに、北海道歯科医師会空知支部美唄方面会が創設されたこととなる。

美唄方面会長 高橋 常保

幹事 桜田巳年二

理事 北野 幸夫、永山喜代二、の陣容である。

同年8月22日 空知支部役員会が岩見沢町1条西5丁目 西川直次郎方であり、次の事項が議題となったとある。

- 1) 会員報告に関する件
- 2) 支部会則審議に関する件
- 3) 経費に関する件
- 4) 会務分掌に関する件
- 5) 報酬規定励行に関する件

料金規定は、すでに問題になっていたものである。

（会長）陸原大輔

（幹事）滝川方面は直井福松。美唄方面は高橋常保。砂川方面は山口勝太郎。

深川方面は樺 隆。岩見沢方面は三枝 清、石黒房男。夕張方面は関 武。

（相談役）佐藤勘次郎

美唄方面会は、すでに大正15年頃より、市内公衆衛生活動に関わったとする記述がある。

昭和57年に刊行された北海道歯科医師会史に北野幸夫元美歯会会長が、美歯会が、この頃よりすでに積極的に学童対象の公衆衛生活動に着手していたと書かれている。

実際東京においては、むし歯予防デーが試みられたのは大正9年であり、それより以前、

各地に口腔衛生普及の活動はなされていた。すなわち、旭川では大正6年より、ライオン講演部が講演会を開催している。

札幌では大正7年に、有志により、学童の歯科検診がなされたとの事である。

大正11、2年頃には、都市部中心に口腔衛生普及活動が広まっており、学校教育に歯科の内容を取り入れるようにとの要望が、大正15年、すでに福岡歯科医師会により文部省に出されている。

美唄方面会の具体的な公衆活動は、市内の学童の口腔診査の実施、学校別のう蝕のデータ作製、交換期乳歯抜去の実施である。

むし歯予防デーにおける無料相談の実施も行なう。

面積590平方キロメートル中に及び点在する18校の健康診査は大変な活動事業である。

その状況をわかりやすく雨田先生が道歯会通信に書かれている。

全町に点在する18校、7千余名を対象として実施する。晩春から晩秋に掛けて毎月1日か2日、方面会員全員が休診して診査に当たった。故高橋常保先生の言葉をお借りすれば、広漠東西6里に余り、南北また5里はあるであろう。夕張町を除けば全国でも有数の大町だろう。拓殖途上の北海道だ、村では或いはこれ以上の大きいのがあるかも知れないが、この大町の遠近に散在する18校、あたかも空知支部会、群雄割拠の会員みたいに、その半数が交通不便な石狩川沿岸或いは原野にあるのだから、テクレば参るのは知れている。海のない港をいく都会の足を利用すれば、半日足らずでおそらく猪1枚だ。7千の調査用紙と共に美唄方面会会員の負担は大きい。然し皆一生懸命だ。とのことで、道路も悪く現在の如く、バスの満足な路線とてなく、マイカー歯科医等まずなかった昭和初年、諸先輩がたのご苦労には頭が下がる。ちなみに1里は4キロ、猪1枚とは、10円のこと。その当時1ドルは2円位、白米1俵60キロが5円の頃。

昭和初期の空知支部会

昭和2年 金融恐慌はじまる 健康保険法施行

昭和3年 三井鉱山k.k.が、日本石油より鉱区買収

美唄町人口 34,440人

昭和4年（1929年）ウォール街株価大暴落

大正時代後期には、道内でも非歯科医対策は各歯科医師会ごとになされていたが昭和初期に入ると北海道歯科医師会の組織ごとに年々の総会に取り上げられ問題化した。

昭和8年には歯科診療所取締り規則が出来、実費診療所や非歯科医の取締りが厳しくなった。

昭和4年4月7日には美唄町、吉積儀蔵方にて、空知支部役員会が開催されている。
議長、高橋常保先生。

昭和2年～4年の間、高橋先生が空知支部会長、扇谷重憲氏が副会長職にあった。

この役員会開催は、

- 1) 支部会学術部の前提として臨時研究会を創設することとし、3月20日創立総会を開催する。
- 2) 非歯科医師取締に関する件
- 3) 報酬規定を無視する会員に対策として、調査費を計上する件
- 4) 共済組合に関する件、道歯会に建議すること

等の為であり、上記の如く広範囲な要件に対する活発な議論と、北海道歯科医師会への積極的な働きかけを行なっている様うかがわれる。

実際、北海道歯科医師会共済設立運動の始まりは、空知支部会の働きかけによるものであり（昭和4年2月21日、空知支部会第5回臨時総会共済組合に関する件の可決）、上記の幹部構成からみても、美唄方面会が、その中心的役割を担っていたとも考えられるのである。なお、この年6月に美唄方面会会則を可決した。

会費は1会員2円50銭。会長 高橋 常保（大正7年開業）幹事 桜田巳年二（大正15年）北野幸夫（大正15年）扇谷重憲（昭和2年我路町）、石川寅雄（昭和2年）美濃龍三（昭和3年）三浦萬三（昭和5年月形町）島田清司（昭和7年我路町）扇谷一貫（昭和6年南美唄）の構成であった。

昭和5年 異色の空知支部会月報

昭和5年 美唄町人口 37,263人 歯科医師15名

昭和6年 国内の恐慌は最悪のドン底を迎え、失業者は250万を数える。

満洲事変 南美唄駅設置（石炭等輸送用）

昭和7年 満洲国建国宣言

三井美唄鉱業所病院開設

昭和8年 国際連盟脱退

昭和5年には、空知支部会報の発刊を空知支部会月報と銘うって、毎月1回発刊を見るに至った。

高橋常保先生は、昭和7年から11年に至る72号発行までの原稿を12冊のノートに記録されていたとされ、道歯会史に雨田実先生が紹介されているので、再度掲載する。